

冬が終わり 早い春が来てしまうのではないかと危惧していたら、再び美しい冬景色がひろがり、ほっとしています。更に、来週には、再び寒波がやって来そうなので、災害や雪かきの苦勞にならない程度に、本来の冬を楽しめればと願っております。

冬特有のクロカン遊びは、やはりカチカチの雪面よりも、適度なパウダーのほうが、面白く安全です。クロカンは、転ぶのが前提なので、転んでも痛くない、特に 大人は怪我の怖れがあるので、パウダーが一番。雪が降り終わり晴れ上がった日などは、木立に雪の花が咲き、その中を歩いて行くのは、最高の至福の世界です。特に、天神さんへの雑木林は最高です。

そうこうするうちに、新年 1 月も終わり、1 年がまもなく過ぎようとしています。子どもたちは、思う存分、大地の暮らしを楽しんでくれています。春夏秋冬の四季がはっきりしている大地だけに、それぞれの季節を十分満喫するように、食 遊び 芸術活動 そして 絵本 お話などを創意工夫して過ごしてきました。そして最後の季節の冬 今季は早くからの雪のお陰で、親子雪遊びを含め、十分な冬を楽しめています。

すっぱり雪景色に覆われている日が多いだけに、朝日 朝焼けの美しさは最高です。特に、ののはな文庫からの朝焼けは、1 年中で、一番美しい光景です。真っ白な雪面と朝日の赤の光りが、素晴らしいです。大地の泊まりに来ていた方々には、迷惑千万だと思いつつ、六時頃には、声をかけ、寒い中 起きてもらい、一緒に大地の朝焼けを見てもらう事が日常です。アルプスの山頂からの景色に負けないと自負しています。

こんな冬景色に後ろ髪を引かれる思いで、いよいよ 2 月を迎えます。陽も長くなり、春めいてくることでしょう。十分冬遊びを楽しんだ後は、ゆっくり目覚めながら、春の訪れを待つことにしましょう。十分遊びほうけて 1 年の最終章を穏やかに過ごしていきましょう。

大地は、既に卒業そして新年度を迎える準備が開始されています。それも、2 月 3 月を穏やかに過ごすためです。やりきったという満足を重ねながら、春を迎えたいと願います。



【長い旅の途上】

星野道夫著 長い旅の途上 を読み返しています。星野が生前に、日本の小学生をアラスカに連れて行くというキャンプがありました。それについてのエッセイから。

「日本にも美しい場所がありますが、僕は どうしてもこの世界を誰かに見せてあげたくてなりません。ルース氷河は、雪 氷 岩だけの、壮大な無機質な山の世界です。溢れる情報の海の中で暮らす今の子どもたちにとって、それは逆の世界です。テレビもゲームもマンガもありません。何もないかわりに、そこにはシーンとした宇宙の気配があります。氷河の上で過ごす夜の静けさ 風の冷たさ、星の輝き・・・情報が少ないということは、ある力を秘めています。それは、人間に、何かを想像する機会を与えてくれるからです。子どもの頃に見た風景が ずっと心の中に残ることがあります。ルース氷河で見た壮大な自然が、そんな心の風景になってくれたらと願います。いつか大人になり、様々な人生の岐路に立った時、人の言葉ではなく、いつか見た風景に励まされたり、勇気を与えられたりする事がきつとあるような気がするからです。」

小さい頃から知識偏重 理屈や理論 屁理屈 知っている 大人の話を耳をそばだて理屈を捏ねる 知ったかぶり ネットで見聞きした テレビで見た・・・などなど 子どもたちには全く罪はないのに、そんな環境が渦巻いています。また、大人も、いろいろ知っていることが凄く 小さな大人であることが素晴らしい 自慢である 身の丈にあっていない大人ぶることが大きな成長である などと勘違いしている大人も多いような気がします。

レイチェルカーソンも 「知っていることは 感じる事の半分にも満たない重要な事ではない」とセンスオブワンダーで述べています。また、知ることと認識とは全く違い、知っている事を原体験する事 実践する事で、真の認識になるとも言われています。

想像力を駆り立てる絵本は、やはり絵や言葉による情報がなく、本当に子どもの想像力を豊かにします。お話は、更に、何も情報がない(語り手の表情だけかな?) だけに、想像力を生み出す最高峰かもしれません。現代では、情報とは、絵やネットやテレビだけでなく、洋服 服装 建物 衣食住全てが、あまりにも豊富になりすぎているのかもしれませんが、自然に親しむと言っても、最近のキャンプブームも然りです。大地の暮らし キャンプや環境や活動などの環境も、少しでも、いろいろな意味で情報が少ないものに、よりしていきたいと思っています。

青ちゃんが朝焼けが大好きなのは、朝のエネルギーが好きなのは、22 歳の時、オーストラリアをバイクで旅していた時に、毎朝 砂漠の地平線が真っ赤に染まり、それを見ながら出発していた日常の影響でしょう。星野さんが言うように、その地平線の光景が、大地の志賀の山並みの稜線のそれとが、一致しているからでしょう。まさに、そんな風景に、45 年ほど経った今でも、励まされ勇気づけられているから、不思議です。

大地で 3 年 4 年 5 年などの期間を過ごした子どもたち。大地を卒業したからと言って、他の幼児施設の子どもたちとどう違うの? と聞かれても、はっきり言えることはありません。(あえて言うならば 温泉に行ったら 腹が割れているほどの身体である持ち主は 大地の子どもだった!!) ぐらいでしょうか。

大地の暮らしで、何を感じ どんな思い出を持ったか、それは 今ではなく もっと時間が立ったとき、5 年後 10 年後いや 25 歳位になった時、もう一度 卒業生に聞いて見たいといつも思っています。一つ一つの原体験が、その子どもの中で何かを形づくるまでは、長い時間が必要だと思います。だから、大地の体験は、その子どもが 親になる年齢期になった時、自分の子どもに何を与えたいか 何を共有したいかと考えるときに、そんな原風景や原体験が湧き上がってくるのではないのでしょうか。と言うより、そんな願いを持って、子どもたちと毎日接しています。

そして、星野道夫が我が子が 1 歳になった時に、浮かんだ詩 カリール・ギブラン

「あなたの子どもは あなたの子どもではない。彼等は、人生そのものの息子であり、娘である。彼等はあなたを通じてくるが、あなたからくるのではない。彼等はあなたとともにいるが、あなたに屈しない。あなたは彼等に愛情をあたえてもいいが、あなたの考えを与えてはいけません。何故なら、彼等の心は、あなたが訪ねてみることもできない、夢の中で訪ねてみることもできないあしたの家にすんでいるからだ・・・」

ベッドから転がりたんこぶを作り泣き叫ぶ我が子を見て、かわいそうに 自分が代わってあげたいと思いつつも、自分は痛みを感じる事ができない。転がったのは自分ではない。しかし、親は我が子の痛みを自分の痛みとして感じるという話があるではないか。いや、身体の痛みと心の痛みは違うということなのか。それなのに、僕は 泣き叫ぶ我が子を見つめながら 【この子は 一人で生きていくんだな】 と考える。たとえ親であっても、子どもの心の痛みさえ本当に分かち合うことはできないのではないのか。ただ一つできる事は、いつまでも見守ってあげるということだけだ。その限界を知ったとき、なぜかたまに子どもが愛おしくなってくる。(星野道夫より)

そう言えば 妻は 子どもがどんな人生を どんな暮らしを生きようとも、自分達が幸せだと思って生きていれば、親としては幸せだ。ただ、それを見守っていればいいと常々いっている。恐るべし 星野伸子!! さすがである。